初等科國語一　第三學年前期用（第二分冊）

昭和二十一年四月二十日　翻刻印刷
昭和二十一年五月　十日　翻刻發行
（昭和二十一年四月二十日文部省檢定濟）

初等科國語一　第三學年用（第二分冊）
〔檢〕定價　金參拾五錢

著作兼發行者　文部省

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　井上源之丞

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式會社

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

Approved by Ministry of Education (Date: Apr. 20, 1946)

昭和二十年　秋

ちんちろ松虫、
虫の聲、
庭の畠で
鳴きました。

ぎんぎら葉の露、
草の露、
月の光が
ぬれました。

ころころもえる火、
ゐろりの火、
栗がはぜます、

二十一　火事

日がくれてまもなく、けたたましく、半鐘（はんしょう）が鳴りだしました。

窓をあけて見ると、西の方の空が、まっかにそまってゐます。火事は、少しはなれた川向かふの町だと、すぐわかりました。おとうさんは、夜業をやめて、急いでしたくをして、家を出られました。おとうさんは、消防員なのです。

おとうさんを送り出してから、おかあさんは、

「火事は、をぢさんのうちの方角だから、わたしは見まひに行きます。おとうさんは、消防の役目でお働きになるのだから。」

といって、出て行かれました。

をちさんのうちの方角と聞いて、私は、恐しくなりました。おばあさんもしんぱいさうです。

家の前を、消防團の人たちが、ポンプを引いて、勢よくかけて行きました。遠く走るポンプ自動車のサイレンの音も聞えます。

向かふの空に、ぱっと火の粉があがったり、また、少し暗くなったりします。半鐘の音、サイレンの音、人の聲などが入りまじって、遠くの方で聞えます。

「だいぶ大きいらしいぞ」

と、道を通る人が、話し合ってゐました。

火事は、なかなか消えさうに見えません。

「さよ子、おまへは、あした、學校があるのだから、しんぱいしないで、もうおやすみ。」

と、おばあさんにいはれて、私は、ねどこの中へはいりましたが、火事が氣になって、なかなか眠れませんでした。

朝、おかあさんに呼び起されて、目をさますと、をちさんや、をばさんが、うちへ來てゐられます。私はびっくりしました。ゆうべの火事で、をちさんのうちも、燒けたさうです。火もとからは、だいぶはなれてゐましたが、風しもになってゐたので、一度運び出した荷物まで燒けてしまったのださうです。

私は、

「をばさん、猫はどうしました。」

と聞きました。をばさんは、

「どうしたかわかりません。荷物をかたづける時、どこにもゐませんでした、何べんも呼んでみたけれど。燒け死んだのかも知れません。」

「かはいさうに。」

と、私はいひました。

やがて、おとうさんが、歸って來られまして。

あ、何よりのしあはせだ。わたしは、消防にばかり働いてゐて、手傳ひもできず、まことにすまなかった。」

といはれました。すると、をちさんは、

「いや、手傳ひは、ねえさんに十分してもらひました。それよりも、あの風に、四つつじで、火事を消しとめたのは、えらいてがらです。町のめぬきの場所が助ったのは、まったく消防團のかたがたのおかげです。」

みんな、つかれきってゐます。平生は元氣なをばさんが、今日は、いちばんしょんぼりとして、さびしさうに見えます。

「をばさん、これから、ずっと私のうちにいらっしゃいね。」

といひますと、おばさんは、

「ああ、たうぶん、やっかいになりますよ。」

あとで聞けば、この火事には、燒け死んだ人もあったさうです。さうして、こんな大火事の起ったのも、ある家の子どもが、マッチをすって、そのもえがらを捨てたのが、もとだといふことです。

「子どもの火あそびが、いちばんいけない。やめることだ、やめることだ。」

おとうさんは、ひとりごとのやうに、かういはれました。

二十二　菅原道眞（すがはらのみちざね）

天神樣にまつられてゐる菅原道眞といふかたは、生まれつき賢い人でありました。その上、小さい時から、よく勉強しましたので、のちには、すぐれた、りっぱな人になりました。學問では、道眞の上へ出る人はないと思はれてゐました。

ある時、都良香（みやこのよしか）といふ人の家で、弓の會がありました。若い人たちが、大勢その家に集って、かはるがはる、的をめがけて弓を引いてゐるところへ、道眞もやって來ました。すると、人々は、

「あの人は學問はできるが、弓はどうだらう。」

「さあ、どうだらうな。」

「だめ、だめ。机の上の勉強ばかりで、腕は線香より細いんだ。」

などと、小さな聲で、ささやき合ひました。

平生から、學問では、とてもかなはない道眞を、今日はひとつ、弓でいぢめてやらうと思ったのでせう、一人の若い男が、つかつかと進み出て、

「どうです。あなたも、弓をおやりになりませんか。」

といひながら、弓と矢を、道眞につきつけました。

おそらく、しりごみするだらうと思はれた道眞は、まへました。すると、今まで、やさしさうに見えた道眞が、急にがっしりと二王樣か何かのやうに、強さうに見えだしました。

あたりはしんとして、せき一つするものもありません。

「ひゅう。」と、音高くつるからはなれた矢は、「ぱん。」と、的のまん中の星を、射抜いて立ちました。

道眞は、つづいて、第二の矢を引きしぼりました。

これも、みごとに、ちゃうど第一の矢とすれすれに並んで、まん中を射抜きました。

第三、第四、第五と、道眞は、目にもとまらぬ手早さで、矢をつがへ、矢を放ちました。的をはづれる矢は、一本もありませんでした。

みんなは、ただ、よったやうになって、大きなため息をつくばかりでありました。

二十三　梅

「あ、梅だ。

梅が咲いてゐる。」と、

勇さんがいひました。

「まあ、うれしい。

春が來たのね。」と、

花子さんがいひました。

「まだ、寒いのに、

感心な花だこと。」と、

ゆり子さんがいひました。

「花もきれいだけれど、

春枝さんがいひました。

「梅は、花よりも

にほひが咲くのです。」と、

正男さんがいひました。

みんなは、

正男さんのいったことが、

おもしろいと思ひました。

二十四　小さな溫床

「春子、チューリップが咲いたよ。來てごらん。」

と、にいさんが、外から窓ごしにいったので、私は、急いで庭へ出ました。

いつか、にいさんが作った小さな温床に、今日も、おだやかな冬の日が、いっぱいにさしこんでゐます。見ると、まん中の鉢に、美しいチューリップの花が一つ、にっこり笑ったやうに咲いてゐます。

「まあ、きれいね。」

と、私は思はずいひました。ふっくらとした花びらがだきあって、まだ十分咲ききらない花は、ちゃうど、おひな様のぼんぼりのやうなかっかうです。下の方は白で、花の口もとのところに、こい紅をさしてゐます。ほんたうに、手に取って、さはってみたいやうな氣がします。

すみれも、一週間ばかり前から咲きだしました。それこそ、ほんたうのすみれ色をした花が、暖い日を受けて、びろうどのやうに、つやつやしてゐます。すゐせんの花が四つ、かはいらしいさくらさうや、ひなぎくも、笑いてゐます。きうりの芽生えも、目だって大きくなりました。

たった一メートル四方ぐらゐの廣さですが、ここばかりは、寒い冬も知らないやうに、みどりの葉が生き生きして、赤や、白や、むらさきの花が、美しく咲いてゐます。

「わたしのお人形さんを、ここへ入れてやりたいなあ。」

と、ひとりごとのやうに、私はいひました。

「どうして。」

「中は暖い春ですもの。」

にいさんは笑って、

「お人形さんが、汗をかくだらう。このガラスのふたをすると、少しすかしておいても、日中は、二十四五度ぐらゐになるから、春といふよりは夏だよ。」

「でも、夜は寒いでせうね。」

「鉢の下には、枯れた葉などが入れてあるから、夜も

と、にいさんはいひました。

二十五　雪舟

雪舟が、子どもの時の話です。

お寺の小僧になってまもないころ、ある日、和尚さんにたいそうしかられました。

「おまへは、また繪をかいてゐるのか。いくらいっても、繪ばかりかいて、ちっともお經をおぼえない。おまへは、口でいって聞かせるだけでは、だめだ。」

かういひながら、和尚さんは、雪舟を引っぱって、本堂へ行きました。

ぶるぶる、ふるへてゐた雪舟は、大きな柱にくくりつけられました。

初めは、ただ恐しさでいっぱいでしたが、さびしい本堂の柱にくくりつけられて、じっとしてゐる間に、

「いつも、お經を讀まうと思ふのだけれど、机に向かふと、つい、繪がかきたくてたまらなくなる。あすからは、きっと、一生けんめいにお經を習はう。わたしが、ここで、こんなにしかられてゐようなどとは、おとうさんも、おかあさんも、ゆめにもお知りにならないだらう。」

こんなことを考へてゐると、雪舟は、何だか悲しくなって、どうとう、しくしく泣きだしました。

涙が、とめどなくこぼれました。ぽたり、ぽたりと落ちて、本堂の板の間をぬらしました。

少し泣きつかれて、ぼんやり、足もとを見てゐた雪舟は、何氣なく、足の親指で、板の間に落ちた涙をいぢってみました。

すると、今まで悲しさうだった雪舟の顔は、急に明かるくなって來ました。雪舟は、足の親指を使ひなが

ら、涙で、板の間に絵をかき始めたのでした。

自分の部屋へ歸ってゐた和尚さんは、しばらくすると、雪舟がかはいさうになりました。もう許してやらうと思って、また本堂へ行きました。

夕方に近い本堂は、少し暗くなってゐました。和尚さんは、どんなに、さびしかったらうと思って、急いで行って見ると、びっくりしました。大きなねずみが一匹、雪舟の足もとにゐて、今にもとびつきさうなやうすです。かまれては、かはいさうだと思って、和尚さんは、「しっ、しっ。」と追ひましたが、ふしぎに、ねずみは、じっとして動きません。近づいて見ると、それは、生きたねずみではありませんでした。雪舟が、板の間に、涙でかいたねずみでした。

和尚さんはおどろきました。急いでなはを解いてやりながら、

「わたしがわるかった。おまへは、絵かきになるがよい。これほど、おまへが上手だとは、今まで知らなかった。」

といひました。雪舟は、にっこりしました。

そののち、雪舟は、一心に絵を習ひました。學問もしました。

雪舟は、とうとう、日本一の絵かきになりました。

二十六　春の雨

もえて明かるい若草に、
しとしと、細い雨が降る。
雨はこぬかか、糸のやう。

ここは川ばた、やなぎの芽、
ぬれて、しづくが落ちるたび、
ひろがる波のわがさゐい。

春は春でも、まだはじめ、
村から町へゆるやかに、
少しにごって行く水よ。

卵のからを浮かべたり、
わらの切れはし浮かべたり。
えびやめだかも、泳がせて。

二十七　大れふ

ぼくらは、はしけに乗ってぐんぐん沖へ出ました。おだやかな海です。文治と、へさきにすわって、船があがると、からだを浮かすやうに、船がさがると、からだを沈めるやうにしてゐました。

「にいさん、はま屋の船だよ。」

文治が指さしたので、見ると、船が一さう走ってゐま屋敷を深めぬいた小舟も見えます。子どもが、船のまん中にゐます。

「あれは、きっとはま屋の正治くんだよ。正治くん、正治くん。」

と大聲に呼びながら、文治が立ちあがりかけると、ともにゐた船方が、

「あぶない。」

といひました。

あとをふり返ると、もう矢島の岬も見えません。目のとどくかぎりはまっさをな水です。

やがて網場へ來ました。何十さうといふ船が、今、思ひ思ひに網を張ってゐるところです。白波を立てながら、行ったり來たりして、目のまはるやうないそがしさです。ぼくらの網船は、もう網をたぐり始めました。

「さあ、のう。」

と、一人がおんどを取ると、大勢の船方が、みんなこれに合はせて、

「やっさ、やっさ。」

と綱をたぐります。だれもかれも、日に焼けたからだから、玉の汗を流してゐます。

網が、せばまって來た時、網船は、ぼくらの乗つてゐる船を呼びました。

網船二さうの間へ、まっすぐに乗り入れました。大きなたもで、網から、いわしをどんどんぼくらの船へあげます。見るまに、船の中には、いわしの山が築かれます。いわしの重みで、船がぐっと傾くほどです。

ぼくらの船は、左右の網船から、竿で押されながら、しだいに網の外へ出ます。出ると、機械をいっぱいに掛けて、もとの海岸へ急ぎました。

いつのまに立てたのか、へさきには、大れふを知らゐました。

（終）

昭和二十一年七月二十九日　翻刻印刷
昭和二十一年九月　五　日　翻刻發行
【昭和二十一年七月二十九日文部省檢査ゟ】

初等科國語一　第二學年前期用（第三分冊）終

㊟　定價金貳拾五錢

著作權所有　著作兼發行者　文部省

東京都小石川區久堅町一〇八番地
翻刻發行兼印刷者　日本書籍株式會社
代表者　木村淵之助
東京都小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　日本書籍株式會社

Approved by Ministry of Education
(Date July 29, 1946)

發行所　東京都小石川區久堅町一〇八番地
日本書籍株式會社